

♪ 声に出して読みたい英文 ⑦

『マザーグース』より、早口言葉の歌を紹介しよう。

まずは、仮定法を用いた woodchuck(リス科の動物)の歌。「もしウッドチャックが木を放り投げたら…」と内容はナンセンスだが、wood(木)と助動詞の would が同じ発音なのがポイント。

次に、p で始まる語が連続する Peter Piper(笛吹きピーター)の歌。舌をかまずに言えるか、試してみよう。

How much wood would a woodchuck chuck*;

If a woodchuck could chuck wood?

He would chuck what wood a woodchuck could chuck,

If a woodchuck could chuck wood.



Peter Piper picked a peck* of pickled peppers*;

A peck of pickled peppers Peter Piper picked.

If Peter Piper picked a peck of pickled peppers,

Where's the peck of pickled peppers Peter Piper picked?



注 chuck 放り投げる peck ベック(体積の単位。1ベックは約9リットル)
pickled pepper トウガラシの漬物

第14章 時制の一致と話法

イメージをつかもう

現在の出来事は現在形、過去の出来事は過去形

次の英文と日本語とを比べてみてください。

1 She says that she is a nurse.

現在形 現在形

(彼女は看護師だと言っている)

2 She said that she was a nurse.

過去形 過去形

(彼女は看護師だと言っていた)



過去

現在

1は「彼女が看護師」なもの、「彼女が言っている」のも現在のことで、両方とも says, is と現在形で表します。2では「彼女が看護師」なもの、「彼女が言っていた」のも過去のことで、両方とも said, was と過去形で表します。英語では基本的に現在に起こったことは現在形で、過去に起こったことは過去形で表すのです。この文では主節と従属節の内容は同時ですから、主節の動詞が過去形(said)であれば、従属節の動詞も(is)の時制も自動的に過去形(was)になります。これを「時制の一致」と呼びます。

日本語にない「時制の一致」

時制の一致は日本語にはない規則です。日本語の場合、従属節にあたる「看護師だ」の部分は現在でも過去でも同じです。「看護師」なのは①では現在のこと、②では過去のことなのに、日本語ではどちらも同じ形です。

もし日本語で「看護師だったと言っていた」なら、言ったときよりも前に看護師だったが、その当時は違っていたということになります。



過去

過去

現在

日本語と英語の表し方が違うため、このようなことになってしまいますが、英語では主節が過去のときは従属節も過去形で表すのが原則です。つい、She said that she is a nurse. と言ってしまいがちになるので、注意しましょう。

時制を一致させなくてもよい場合

上記のように、「時制の一致」が起こるのは、文中における動詞が主節の内容に応じた時制を持ち、その結果同じ時点で起きた別の内容(従属節)も同じ時制で表すことになっているからです。

それをふまえて、ここでは時制の一致の例外を見ていきましょう。

- ① We learned that the sun **rises** in the east and **sets** in the west.

(私たちは、太陽は東から昇り、西に沈むと習った)

- ② He said that he **brushes** his teeth before he **goes** to bed.

(彼は寝る前には歯を磨くと言った)

①「太陽が東から昇り、西に沈む」のは現在も変わらないから、現在形のままでよいのです。ここでもし、動詞を過去形にしたら、太陽が東から昇るのは過去の話であって、まるで今は違うかのような感じがします。

②「寝る前に歯を磨く」のが現在でも習慣であるならば、現在形のままでよいのです。もし、brushes → brushed, goes → went と過去形にすれば、それは「その1日だけの過去の行為を表す」ことになります。

話法とは

「話の伝え方」を話法と言い、これには2通りの方法があります。

- ① 直接話法 Jeff said, "I'm happy to see **you**."

(ジェフは「あなたに会えてうれしい」と言った)

- ② 間接話法 Jeff said that **he was** happy to see **me**.

(ジェフは、私に会えてうれしいと言った)



過去

現在

①のように、人の発言を“...”の中に入れて、その発言内容をそのままの形で伝える方法を直接話法と呼びます。これに対して、②のように話す人(書く人)が発言内容を、自分の言葉で客観的に伝える方法を間接話法と呼びます。

①の直接話法はセリフをそのまま変えずに言うだけなので、臨場感が感じられます。しかし一方では子どもっぽく感じもしないではありません。②の間接話法は、聞いたセリフを自分の言葉で表現しなおしているの、客観的に述べている印象を受けます。どちらがよいとは一概には言えませんが、内容や場合によって、どちらの話法を使うべきか、考える必要があります。

この章ではこのような話法や時制の関係について、気をつけて見ていきましょう。



§156 必修 時制の一致の法則

- 352 She **says** that she **is** fine. 彼女は元気だと言っている。
 → She **said** that she **was** fine. →彼女は元気だと言った。
- 353 I **am** afraid that I **made** some mistakes. 私はいくつかミスをしたと思う。
 → I **was** afraid that I **had made** some mistakes.
 →私はいくつかミスをしたと思った。

Point 1 従属節が主節と同時の場合

352の上の文は、彼女が「元気である」のも、そう「言っている」のも現在のことなので、is, saysとどちらも現在形で表している。一方352の下の方の文では、言ったのは過去のこと、元気なのはそう言った時点つまり過去のことなので、was, saidとどちらも過去形で表している。このように、主節の動詞の時制が過去形になると、従属節の動詞もそれに合わせて変わることを、時制の一致と言う。

Point 2 時制の一致と日本語

日本語の場合は、過去の内容でも、動詞それぞれに過去形を使ったりしない。「元気だと言っている／元気だと言った」のように、現在の文でも過去の文でも言う内容は同じ形で表している。

I **think** that she **is** sleepy.

(私は彼女は眠いのだと思う)

→ I **thought** that she **was** sleepy.

(私は彼女は眠いのだと思った)

*日本語では「思う」が「思った」に変わるだけで、従属節中の「眠いのだ」の部分は変わらない。

Point 3 従属節が主節より前の場合

353の上の方の文では、私が「ミスをした」のは過去のことだが、そう「思っている」のは現在である。だから、I made some mistakesは過去形で、I am afraidは現在形で表す。一方353の下の方の文では、「思った」のは過去のことだが、「ミスをした」のはそれより前のことになる。だから、I was afraidには過去形、I had made some mistakesには過去完了形を用いて、時間のずれを示している。まとめると、次のようになる。

主節の動詞	現在形 → 過去形
従属節の動詞	現在形 → 過去形
	過去形・現在完了形 → 過去完了形

「ミスをする」は make a mistake。動詞の miss は「打ちそこなう、(乗り物などに)乗り遅れる、～がいないのを寂しく思う」などの意味。

I **believe** that she **did** her best.

(私は彼女が最善をつくしたと信じる)

→ I **believed** that she **had done** her best.

(私は彼女が最善をつくしたと信じた)

We **hear** that he **has left** for London.

(私たちは、彼がロンドンへ出発したと聞いている)

→ We **heard** that he **had left** for London.

(私たちは、彼がロンドンへ出発したと聞いた)

leave ~は「～を去る」だが、leave for ~で「～に向けて出発する」の意味になる。

注意 従属節中の助動詞の変化

① 従属節中に助動詞があるときは、その助動詞を過去形に変える。

will → would, shall → should, can → could, may → might となる。

I **hope** that she **will** come to the party.

(私は彼女がパーティーに来るだろうと思う)

→ I **hoped** that she **would** come to the party.

(私は彼女がパーティーに来るだろうと思った)

② 過去形のない must, should, ought to, used to はそのままよい。

I **think** that you **should** apologize to him.

(あなたは彼に謝るべきだと思う)

→ I **thought** that you **should** apologize to him.

(あなたは彼に謝るべきだと思った)

ただし、**must** が「～しなければならない」の意味のときは、**had to** で言いかえてもよい。

I **know** that I **must** finish the job by five.

(5時までに仕事を終えなければならないのは知っている)

→ I **knew** that I **must [had to]** finish the job by five.

(5時までに仕事を終えなければならないのは知っていた)

CHECK AND EXPRESS 156

()内の動詞を適当な形になおし、英文を完成しなさい。

- Tom said that he (is) watching TV.
- I hoped that I (will get) a better job.

§ 157 必修 時制の一致の例外

354 We learned that the earth goes around the sun.

私たちは地球が太陽のまわりを回っていると学んだ。

355 She said that she goes jogging every morning.

彼女は毎朝ジョギングに出かけると言った。

356 Our teacher said that World War II ended in 1945.

先生は第2次世界大戦は1945年に終わったと言った。

たとえ主節の動詞が過去形であっても、従属節の内容が次の場合には、時制の一致をさせなくてもよい。

Point 1 一般的真理 (→ 354)

時間に左右されない事柄なので、従属節の動詞は現在形のままでよい。

The boy knew that three times five is 15.

(その少年は $3 \times 5 = 15$ を知っていた)

この times は「~倍」の意味。

Point 2 現在の事実・習慣 (→ 355)

現在も変わらない事柄を表すので、従属節の動詞は現在形のままでよい。

I didn't know that Canberra is the capital of Australia.

(私はキャンベラがオーストラリアの首都だと知らなかった)

Point 3 歴史上の事実 (→ 356)

以前に起こった事柄であることが明らかなので、従属節の動詞は過去形のままでよい(わざわざ過去完了形にしなくてもよい)。

Ken said that he was born in 1990.

(ケンは1990年に生まれたと言った)

Point 4 仮定法

従属節の動詞は仮定法の時制のままである。

I often thought (that) I would travel around the world if I were rich. (もしお金があれば、世界一周旅行をするのだがとよく思った)

Cf. I often think (that) I would travel around the world if I were rich. (もしお金があれば、世界一周旅行をするのだがとよく思う)

I wished I had gone to college.

(大学へ行っておけばよかったのだと思った)

Cf. I wish I had gone to college. (大学へ行っておけばよかったと思う)

CHECK AND EXPRESS 157

()内の動詞を適当な形になおし、英文を完成しなさい。

1. She told me that she (be) born on St. Valentine's Day.
2. We learned that water (boil) at 100°C.

§ 158 必修 直接話法と間接話法

357 Bob said, "I am going to see a movie."

ボブは「私は映画を観に行くつもりだ」と言った。

358 Bob said that he was going to see a movie.

ボブは、映画を観に行くつもりだと言った。

Point 1 2種類の話法

人の言った言葉を伝えるのに、次の2種類の方法がある。

- a. 直接話法→“ ”(引用符)を使って人の発話をそのまま伝える(→ 357)。
- b. 間接話法→引用符を使わずに、人の発話内容を自分(話者)の言葉になおして伝える(→ 358)。

!注意 伝達動詞と被伝達文

357, 358 の said を伝達動詞と言い, “ ”(引用符)内の I am going to see a movie. を被伝達文(伝達される文)と呼ぶ。

引用符“ ”のことを、クォーテーションマークス(quotation marks)とも言う。

Point 2 直接話法と間接話法

直接話法と間接話法は形の上で次のような違いがある。

Bob said, "I am going to see a movie." [直接話法]
Bob said that he was going to see a movie. [間接話法]

- a. 間接話法には、伝達動詞の後のコンマと“ ”(引用符)がない。
- b. 間接話法の伝達される文は that 節などである。
- c. 伝達される文の中の代名詞などは、間接話法では話す人の立場や状況に応じて変わる。
- d. 伝達動詞が過去形るとき、間接話法では時制の一致の法則により動詞の時制が変わる。

CHECK AND EXPRESS 158

2文がほぼ同じ意味を表すように、()内に適当な1語を入れなさい。

1. My mother said, "I am all right."
My mother said () she was all right.
2. John said, "I will sing for you."
John said () he would sing for me.

§ 159 必修

平叙文の伝達

359 Father said to me, "I'm very busy today."

→ Father told me that he was very busy that day.

父は私にその日はとても忙しいと言った。

360 Kate said to him, "I saw your sister yesterday."

→ Kate told him that she had seen his sister the day before.

ケイトは彼に1日前に彼の姉[妹]に会ったと言った。

Point 1 伝達動詞

伝達する動詞の say to ~ [said to ~] は、間接話法では tell ~ [told ~] に変えるのがふつうである(→ 359, 360)。ただし、to ~ がないときは、間接話法でも say [said] をそのまま用いる。

Point 2 伝達される文

伝達される文(被伝達文)は、コンマと引用符(“ ”)をとり、接続詞の that で始まる名詞節に変える。この that は省略される場合もある。

359→ Father told me (that) he was very busy that day.

Point 3 時制の一致

伝達動詞が過去形の場合は、時制の一致の法則に従って、被伝達文中の動詞の時制を変える。359 は am → was, 360 は saw → had seen に変わっている。

Point 4 人称代名詞

被伝達文中の人称代名詞を、話し手(自分)の立場から見たものに変える。

359 の“I”は客観的に見て Father のことだから he に、360 の“I”は Kate のことだから she に、“your sister”は話し相手の姉[妹]のことだから his sister に変えている。

!注意 主語が変われば動詞の形も変わる

人称代名詞の変化に対応して、動詞の形も変わることに注意しよう。

Jim always says to me, "You are very kind."

→ Jim always tells me that I am very kind.

(ジムはいつも、私がとても親切だと言う)

Point 5 指示代名詞の変化

被伝達文中の this, these は、ふつうそれぞれ that, those に変える。

Ken said, "I bought these pens at a supermarket."

→ Ken said (that) he had bought those pens at a supermarket.

(ケンはそのペンをスーパーで買ったと言った)

Point 6 時・場所を表す副詞(句)の変化

伝達動詞が過去形の場合、被伝達文中の時・場所を表す副詞(句)は、間接話法の文ではふつう次のように変える。359 では発言の時点での today (今日)を、that day(その当日)に変えている。

here → there	today → that day
now → then	tonight → that night
tomorrow → the next [following] day	
yesterday → the day before, the previous day	
last night [week] → the night [week] before,	
the previous night [week]	
next month [year] → the following month [year],	
the next month [year]	
~ ago(今から~前) → ~ before(その時から~前)	

previous は「前の」、
following は「次の」
の意味。

Tom said, "I am staying in London now."

→ Tom said that he was staying in London then.

(トムはその時ロンドンに滞在中だと言った)

Ann said to me, "Bob left here an hour ago."

→ Ann told me that Bob had left there an hour before.

(アンは私に、ボブが1時間前にそこを立ち去ったと言った)

!注意 副詞(句)の変化は内容に応じて考える

すでに述べたこれらの副詞(句)の変化はあくまでも原則である。例外もあるので注意しよう。いつも原則通りに副詞(句)を変化させるのではなく、被伝達文の内容や、伝達される状況を判断して、その内容が正しく伝わるようにすること。

Yesterday Ken said to Mr. Hill, "I'll hand in my report tomorrow."

→ Yesterday Ken told Mr. Hill that he would hand in his report today.

(昨日ケン先生はヒル先生に「明日レポートを提出します」と言った)

*昨日の時点での「明日」は、今の時点では「今日」になる。

CHECK AND EXPRESS 159

2文がほぼ同じ意味を表すように、()内に適当な1語を入れなさい。

1. Ann said to me, "I want to learn Japanese."

Ann () me () () () to learn Japanese.

2. Bob said to me, "I saw your dog here yesterday."

Bob () me that () () () my dog () the day ().

3. Lucy said to him, "I had a great time last night."

Lucy () him that () () () a great time the night ().

361 He said to me, "Are you going back to Japan?"
→ He asked me if [whether] I was going back to Japan.
彼は私に日本へ帰るのかと尋ねた。

362 I said to him, "What did you buy for her birthday?"
→ I asked him what he had bought for her birthday.
私は彼に彼女の誕生日の贈り物に何を買ったのかと尋ねた。

Point 1 Yes / No 疑問文

Yes / No 疑問文を間接話法に転換する基本的な手順は以下の通りである(→ 361)。

- say to [said to] を ask [asked] に変える。
- 接続詞には if [whether] (〜かどうか) を用い、疑問符はピリオドに変える。if [whether] 節の中は平叙文と同じ(S + V)の語順にする。
Matt said to me, "Do you like pizza?"
→ Matt asked me if [whether] I liked pizza.
(マットは私にピザが好きかと尋ねた)
- 動詞の時制の一致や人称代名詞・指示代名詞・副詞(句)などの変化は、平叙文の場合と同じである。

He said to me, "Did you go to the concert last night?"
→ He asked me if [whether] I had gone to the concert the night before.
(彼は私に、前日の夜コンサートに行ったのかと尋ねた)

pizza の発音は [pɪtsə]。"ピザ"ではない。

Point 2 疑問詞で始まる疑問文

疑問詞で始まる疑問文を間接話法に転換する基本的な手順は以下の通りである(→ 362)。

- say to [said to] を ask [asked] に変える。
- 疑問詞はそのまま置く。疑問詞が接続詞の働きをする。疑問詞の後の語順は、平叙文と同じ(S + V)にする。疑問符はピリオドに変える。
Nick said to me, "How much did it cost to repair your car?"
→ Nick asked me how much it had cost to repair my car.
(ニックは私に、私の車を修理するのにいくらかったかと尋ねた)
- 動詞の時制の一致や人称代名詞・指示代名詞・副詞(句)などの変化は、平叙文の場合と同じである。

My father said to me, "Where did you go yesterday?"
→ My father asked me where I had gone the day before.
(父は私に、昨日どこへ行っていたのかと尋ねた)

注意 疑問詞が主語の疑問文はもともと語順が(S + V)なので、間接話法にしても語順は変わらない。

I said to them, "Who came first in the race?"
→ I asked them who had come first in the race.
(私は彼らに誰がレースで1着になったのか尋ねた)

race 「レース、競走」
は同じ綴りで「人種」
の意味もある。

CHECK AND EXPRESS 160

2文がほぼ同じ意味を表すように、()内に適当な1語を入れなさい。

- Emi said to me, "Have you ever been to Europe?"
Emi () me () () had ever been to Europe.
- Lisa said to him, "Which tie are you going to wear today?"
Lisa () him which tie () () going to wear () ().
- Rod said to her, "How much did your cell phone cost?"
Rod () her how much () cell phone () ().

読解BOX (4) 描出話法とは

直接話法と間接話法の間接的な話法を「描出話法」または「中間話法」と言う。この話法には次のような特徴がある。

- 〈主語+伝達動詞〉はなく、文の形式は直接話法とよく似ている。
- 人称代名詞や動詞の時制は間接話法と同じように用いられる。

描出話法を用いることによって、描写が生き生きとしてくるので、小説などでこの話法がよく用いられる。次の文章は『ドリアン・グレイの肖像』の中で、画家のHallwardが自分の描いたDorian Grayの肖像画が変わっているのを見て驚く場面である。斜字体の部分が描出話法である。

A cry of horror came from Hallward's lips when he saw the horrible thing on the canvas looking at him. *It was Dorian Gray's own face! Yes, it was Dorian himself. But who had painted it?* He recognized his own brushwork, and the frame was his own design. In the left-hand corner of the picture was his own name.

He had never done that. He felt as if his blood had changed from fire to ice in a moment. *His own picture! What did it mean? Why had it changed?* He turned and looked at Dorian Gray.

カンバスの上から恐ろしいものが自分を見ているのを目にして、ホルワードの唇から恐怖の叫びがもれました。ドリアン・グレイ自身の顔だ。そう、それはドリアン自身だ。でも、誰が描いたのだろうか。彼には自分の筆づかいがわかりました。額縁も彼のデザインでした。絵の左隅には、彼の名前がありました。

決して自分がやったことではない。彼は、まるで一瞬にして血が火から氷へと変わったように感じました。自分の絵だ! どういう意味だ? なぜ変わったのだ? 彼は振り向いて、ドリアン・グレイを見ました。

S161 必修

命令文の伝達

363 Bill said to me, "Answer the phone."

→ Bill told me to answer the phone. ビルは私に、電話に出るように言った。

364 Mother said to me, "Don't give up hope."

→ Mother advised me not to give up hope. 母は私に、希望を捨てないように言った。

Point 1 命令文の伝達

伝達される文が命令文の場合は、間接話法では〈tell [ask] + 人 + to 不定詞〉の形にする。その手順は以下ようになる。

1) 被伝達文の内容によって、伝達動詞を次のように変える。

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 命令の場合 | → tell, order, command など(→ 363) |
| 依頼・要求の場合 | → ask, beg, request など |
| 忠告・警告の場合 | → advise, warn など(→ 364) |

2) 被伝達文中の動詞(原形)を to 不定詞に変える。ask, beg などを用いる場合は please を省く。

I said to her, "Please call me later."

→ I asked her to call me later.

(私は彼女に後で電話をしてくれるように頼んだ)

/注意 呼びかけの語

命令文に呼びかけの語が含まれる場合、間接話法では伝達動詞の目的語にする。

I said, "Stop the car, Tom."

→ I told Tom to stop the car.

(私はトムに車を止めるように言った)

Q参考 You must ~. の伝達

義務・必要を表す must を含む文も、命令文と同じと考えてよい。

The doctor said to me, "You must stop smoking."

The doctor told me to stop smoking.

(医者は私にタバコをやめるように言った)

Q参考 Will you ~? の伝達

形は疑問文でも、内容が「~してくれませんか」と依頼を表している場合は、命令文と同じように〈S + V + 人 + to 不定詞〉の形にしてよい。

Mother said to me, "Will you help me cook dinner?"

→ Mother asked me to help her cook dinner.

(母は私に、夕食の調理を手伝うよう頼んだ)

「命令する」中では tell が最も口語的で、command が一番形式ばった言い方。order は目下の者に指示する場合に使われる。

Point 2 否定の命令文の伝達

被伝達文が否定の命令文の場合には、not, never を to 不定詞の前に置き、(p. 163 参照) 〈tell + 人 + not [never] to ~〉の形にする(→ 364)。

The teacher said to us, "Don't be noisy."

→ The teacher told us not to be noisy.

(先生は私たちに、さわぐなと言った)

Mr. Brown said to his wife, "Don't talk too much."

→ Mr. Brown asked his wife not to talk too much.

(ブラウンさんは妻にあまりおしゃべりしないように頼んだ)

CHECK AND EXPRESS 161

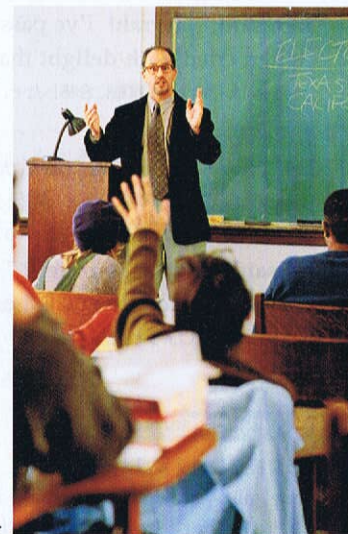
2文がほぼ同じ意味を表すように、()内に適当な1語を入れなさい。

1. She said to him, "Please show me how to do it."

She () him () () her how to do it.

2. The police officer said to her, "Drive at a safe speed."

The police officer () her () () at a safe speed.



The teacher told us not to be noisy.▶

§ 162 発展

感嘆文などの伝達

365 The old man said, "What a kind girl she is!"

→ The old man **cried out what** a kind girl she was.

その老人は、彼女はなんてやさしい子なんだろうと叫んだ。

366 She said, "How lucky you are!"

→ She **said that I was very** lucky.

彼女は、私がとても幸運だと言った。

Point 感嘆文の伝達

感嘆文を間接話法の文に変えるときは、一定の形式がないので、被伝達文の内容を工夫して伝えればよい。

a. **what, how** を用いる場合… 感嘆文を **what, how** で始まる節に変える。この場合の語順は感嘆文の語順と同じである(→ 365)。

b. 接続詞 **that** を用いる場合… 感嘆文を **very** を含む **that** 節に変える。この場合の語順は平叙文と同じである(→ 366)。

いずれの場合も、伝達動詞は伝達される内容に応じて、**say, tell, cry (out), exclaim** などを用いる。

! 注意 Oh などを含む文

被伝達文に Oh, Alas, Hurrah などの感嘆詞が含まれている場合は、伝達動詞の後に **with delight [joy]** (喜んで)、**with sorrow** (悲しそうに)、**with a sigh** (ため息まじりに) などの感情を表す副詞句をつける。

Mike said, "Oh, what a pity it is!"

→ Mike **cried with sorrow** what a pity it was.

(マイクは、なんとかわいそうにと悲しそうに叫んだ)

Tom said, "Hurrah! I've passed the exam!"

→ Tom **cried with delight** that he had passed the exam.

(トムは、やった! 試験に合格したぞ、と叫んだ)

Q 参考 Let's ~. の伝達

Let's ~ (～しよう) の文を間接話法に変えるときは、伝達動詞に **suggest, propose** (提案する) を用い、被伝達文を (that + we [they] + (should) + 動詞の原形 ~) の形にする。

He said, "Let's take a break."

→ He **suggested that we (should) take a break.**

(彼は一休みしようと提案した)

CHECK AND EXPRESS 162

次の文を間接話法の文に書きかえなさい。

1. Nancy said, "How pretty you are in your new dress!"
2. He said, "What a beautiful song this is!"

§ 163 発展

その他の注意すべき文の伝達

367 Mother **said to me**, "I am tired **but** I have to work."

→ Mother **told me (that)** she was tired **but that** she had to work.

母は私に、疲れているが働かなければと言った。

368 Ann **said to me**, "You have a nice digital camera. Where did you buy it?"

→ Ann **told me (that)** I had a nice digital camera and **asked me where** I had bought it.

アンは私にすてきなデジカメですぞねと言ひ、どこで買ったのかと尋ねた。

Point 1 重文の伝達

被伝達文が and, but で結ばれているときは、and, but の後に接続詞の **that** をもう一度用いる(→ 367)。2つの that のうち、伝達動詞の直後の that は省略できるが、後の that は省略できない。

Kate said to me, "I'll be seventeen next week, **and** my parents are having a party for my birthday."

→ Kate **told me (that)** she would be seventeen the following week **and that** her parents were having a party for her birthday. (ケイトは私に次の週17歳になるので、両親が誕生パーティーを開いてくれる予定だと言った)

! 注意 複文の伝達

単文の場合と同じだが、従属節中も時制の一致をしたり、代名詞・副詞(句)などが変化するので注意が必要。

She said to me, "Do you know where he has gone?"

→ She **asked me if I knew** where he **had gone.**

(彼女は私に、彼がどこへ行ったか知っているかと尋ねた)

Point 2 種類の異なる2文の場合

(平叙文+疑問文)など、種類の異なる複数の文を伝達する場合、それぞれの文ごとに別の伝達動詞や伝達の形を用いる(→ 368)。

My mother said to me, "What are you doing? **Hurry up and eat breakfast.**"

→ My mother **asked me what** I was doing and **told me to hurry up and eat breakfast.**

(母は私に何をしているのと聞き、急いで朝ごはんを食べるようにと言った)

CHECK AND EXPRESS 163

次の文を間接話法になおしなさい。

1. He said to me, "I can't eat carrots but Mary can." * carrots ニンジン
2. My brother said, "I am in town on business. Are you free for dinner?"

birthday のように、ir は [ɔ:r] と読む。他に、first (第1の)、third (第3の)、skirt (スカート) がある。また、er, ur も [ɔ:r] と読む。her (彼女)、turn (回転)、curve (カーブ) など。

♪ 声に出して読みたい英文 ⑧

映画 Independence Day (1996) の中の話である。巨大な宇宙船が地球に接近し、異星人が人類への攻撃を仕掛けてきた。我々人類も反撃するが、世界中の国々で戦いに負け、都市は廃墟と化していく。そこで、人類はその存亡をかけ、異星人に最後の総攻撃を仕掛ける。その最後の決戦前、パイロットたちに対し、アメリカの大統領がスピーチをするのだ。命をかけて人類を守ろうとする者たちが、このスピーチによって大いに勇気づけられる場面である。もちろん、これは映画の中の話なので架空のものであるが、スピーチの持つ大きな力が伝わって来るのがわかるだろう。

Good morning. In less than an hour, aircraft* from here will join others from around the world. And you will be launching* the largest aerial battle in the history of mankind. "Mankind." That word should have new meaning for all of us today. We can't be consumed by our petty differences anymore. We will be united in our common interests. Perhaps it's fate* that today is the Fourth of July, and you will once again be fighting for our freedom... Not from tyranny,* oppression,* or persecution* ...but from annihilation.* We are fighting for our right to live. To exist. And should we win the day, the Fourth of July will no longer be known as an American holiday, but as the day the world declared in one voice: "We will not go quietly into the night! We will not vanish* without a fight! We're going to live on! We're going to survive!" Today we celebrate our Independence Day!



映画「インディペンデンス・デイ」のポスター▶

注 aircraft 航空機 launch 始める fate 運命 tyranny 圧制
oppression 弾圧 persecution 迫害 annihilation 全滅 vanish 消える

第15章 否定

イメージをつかもう

ケネディ大統領の言葉

歴代のアメリカ合衆国大統領の中で、初代のワシントンや第17代リンカーンなどと並んで現在でもその評価・人気が高くて高いのが、第35代大統領、ジョン・F・ケネディー (John Fitzgerald Kennedy) です。その名前はニューヨークの国際空港やフロリダの宇宙センターに冠されています。彼は数多くの言葉を残していますが、そのいくつかを紹介してみましょう。

- 1 My fellow Americans, ask **not** what your country can do for you; ask what you can do for your country.
(アメリカの同胞のみならず、祖国があなたの方のために何をしてくれるかを問わず、自分が祖国のために何が出来るかを問うてください)
- 2 Confident and unafraid, we must labor on — **not** toward a strategy of annihilation but toward a strategy of peace.
(自信を持って恐れることなく私たちは努力を続けなければならない、人類絶滅の戦略に向かってではなく、平和の戦略に向かって)
- 3 All of us do **not** have equal talent, but all of us should have an equal opportunity to develop our talents.
(私たちみんなが才能を等しくは持っていない、しかし自分の才能を伸ばしていく機会を等しく持つ)
- 4 Efforts and courage are **not** enough **without** purpose and direction.
(目的と方針がなければ努力と勇気では十分ではない)
- 5 Forgive your enemies, but **never** forget their names.
(あなたの敵を許さない、だがその名前は決して忘れてはいけない)

ケネディーのこれらの言葉はすべて、否定が含まれています。否定文と肯定文を対比的に述べたり、否定的意味の言葉を効果的に用いたりしてインパクトを強めています。